修士論文（要旨）
2009年1月

拍手動作の心理的効果について

指導　鈴木　平　准教授

国際学研究科
人間科学専攻
207J5007
片山　弘之

修士論文/拍手動作の心理的効果について

目次

第1章　序論
1. はじめに　…… 1
2. 研究背景　…… 2
2.1　拍手に関するこれまでの研究
2.2　コミュニケーションにおける拍手の役割
2.3　円滑なコミュニケーションのための手段としての拍手
2.4　手の動作の変化が気分状態に及ぼす影響について
2.5　身体と心理の共変体としての人間
2.6　共感性と認知的側面の関連
2.7 先行研究のまとめ
3.目的　…… 6

第 2 章　研究1（予備調査1）　……7
1.目的
2.方法
3.結果

第 3 章　研究2（本実験 1）　…… 9
1.目的
2.方法
3.結果と考察

第 4 章　研究3（本実験 2）　…… 19
1.目的
2.方法
3.結果と考察

第 5 章　要約　…… 50

文献　…… 53
謝辞　…… 54
資料

序章

素晴らしい演技、演奏、プレーに対して感動した観客が決まって行うものといえば「拍手」である。その意味は文化圏によって異なると言われているが、西欧圏や日本では喜び・感動・称賛・励ましなどポジティブな意味が込められた社会的行為として用いられている。このようにポジティブな感情を表す手段として用いられてきた拍手は、今では新たな活用もされており、拍手をすることによって「場を盛り上げる」「活気を生む」などのポジティブな感情を生み出すための対人関係におけるコミュニケーション手段としても注目されつつある。そこで、本研究ではそのようなコミュニケーション手段としての拍手の新しい活用に着目し、拍手行動場面においてどの要因によって人はポジティブ感情を認識するのかを、拍手行動場面と手の動作の観点から研究しようとするものである。

目的

拍手行動の手の動作と気分状態の関連性について検討を行うために以下を具体的な目的とする。

1：拍手場面の映像を観察することによって拍手をしている人の感情が認識できるかどうかを検討する。

2：拍手場面の映像について拍手動作の模倣をしながら観察し、動作体験が印象評定に影響を与えるのかどうか検討する。

3：他者への共感性が、拍手行動に込められた感情を認識することへ影響するかどうか検討する。

研究１（予備調査）「拍手場面印象評定尺度」作成のための項目選定

本実験で使用する「拍手場面印象評定尺度」作成のための項目として作成するため、首都圏の大学生（18 名）を対象に直接聞き取り調査を行った。

研究2（本実験1）「拍手場面印象評定尺度」の作成

「拍手場面印象評定尺度」を作成するために、東京都私立大学生 396 名（男性 118 名、女性 278 名）を対象に4種類の拍手行動場面の VTR を鑑賞させ、被認定者の感情・気分状態について印象評定をさせた。VTR 上では3名の男女が拍手を行っているが、その顔については被験者は見えないようになっている。印象評定結果について因子分析を行った結果、「称賛」「不愉快」「幸福感」「攻撃性」「のんびり」の5つの種類の感情因子が確認された。この結果から、拍手場面において拍手をしている者に対して、ポジティブな感情だけでなく、ネガティブな感情も認識される可能性が示された。

研究3（本実験 2） 感情認識における拍手動作の効果の検討

拍手動作を視覚的に観察することと、実際に拍手動作を行いながら観察することで、認識される感情の違いがあるのかどうか検討するために、「VTR 鑑賞群」（拍手動作を行わずに VTR を観賞する群）および「VTR 拍手動作群」（拍手動作を行いながら VTR を観賞する群）を対象に、VTR ごとに研究2で作成した「拍手場面印象評定尺度」（48 項目・6 件法）の下位項目の合計得点の平均値と標準偏差の推移、および t 検定を行った。その結果、VTR1（歓迎の場面）、VTR2（飽きの場面）、VTR4（笑いの場面）において「VTR 拍手動作群」の方が「VTR 鑑賞群」よりも有意に高くなっている因子が確認された。

次に他者への共感性および他者関心度は、拍手行動における感情を認識することと関連があるのかどうかを検討するため、「拍手場面印象評定尺度」と三原（1998）が作成した共感性の認知的側面に関する「視点とり・役割とり尺度」（8 項目・6 件法）および他者への関心度に関する「他者関心度尺度」（15 項目・6 件法）の下位項目の間で VTR ごとにピアソンの積率相関係数を求めた。その結果、各 VTR で有意な相関関係が確認された。

また共感性の認知的側面を示す「視点とり・役割とり」および「他者関心度」の傾向が、拍手場面における感情認識に影響を与えているのかどうか検討するため、「VTR 鑑賞群」と「VTR 拍手動作群」、「視点と

り・役割とり尺度」と「他者関心度尺度」の高低群について、2×2の分散分析を行い、各 VTR の「拍手場面印象評定尺度」の下位項目について平均点の比較を行った。有意な交互作用が見られたものについて Tukey 法による多重比較を行った。その結果、いくつかの有意な結果が確認された。中でも「内的他者関心意識傾向」における交互作用は、VTR1（歓迎の感情を示す拍手場面）、VTR3（祝福の感情を示す拍手場面）、VTR4（祝いの感情を示す拍手場面）の3つの VTR で確認された。VTR1（歓迎の感情を示す拍手場面）においては4つの感情因子について有意な結果が確認された。さらにいずれの VTR の因子についても「VTR 拍手動作群」では「内的他者関心意識傾向」低群の方が高群よりも平均点が高いという結果であった。このことから、他者の感情を重視し他者の内面に関心をおいているかということ、そして拍手動作を実際に行うことは、感情認識において影響を与える可能性があることが示された。

日常生活場面ではそのときの場の雰囲気や相手の表情や拍手の継続時間など様々な要因が感情認識に影響していると考えられる。そのため今回の結果や得られた傾向が実際の拍手場面でそのまま作用しているとは必ずしも言い切ることはできない。しかしながら拍手動作という要因を設定した上で印象評定の実験を行った結果、一定の傾向や知見が得られたことは、身体（動作）がもつ心理的効果の影響力、および身体と心理の密接な関係が改めて実証されたと言えるだろう。

文献

斎藤 孝 (2005). 上機嫌の作法 角川書店

春木 豊 (2002). 身体心理学 川島書店

堀 洋道 (2002). 心理測定尺度集Ⅰ －人間の内面を探る＜自己・個人内過程＞ サイエンス社

石塚 樹・小野哲雄 (2007).拍手に見られる個人―集団間ミクロマクロループ構造のモデル化 公立はこだて未来大学大学院システム情報科学研究所 2007 社会法人 情報処理学会 研究報告

坂野雄二・福井知美・熊野宏昭・堀江はるみ・川原健資・山本晴義・野村 忍・末松弘行 (1994). 新しい気分調査票の開発とその信頼性・妥当性の検討 心身医学第 34 巻 第8号 p630-636 日本心身医学会

鈴木 平・春木 豊 (2003). 身体動作と気分状態の相関について 平成 12～13 年度科学研究費補助金(基盤研究C(2))身体の動きと生理、心理状態の関連性に関する研究 (課題番号 12610093) 研究成果報告書p13-36

鈴木 平・春木 豊 (2003). 手の動作速度の変化が気分状態に及ぼす影響 平成 12～13 年度科学研究費補助金(基盤研究C(2))身体の動きと生理、心理状態の関連性に関する研究 (課題番号 12610093) 研究成果報告書p37-42

西村竜一、宮里 勉 (1999). 仮想的集団における拍手音の合成 信学技報 社会法人 電子情報通信学会

久野和宏 (1992). 拍手(柏手)のこと 信学技報 vol.92 No.71 p.53-60 社会法人 電子情報通信学会

三原 亘 (1998). 共感性尺度の認知的側面に関する一研究 性格心理学研究 第6巻 第2号 152-153

吉良文郷・仲谷美江・西田正吾 (2003). リズムを介した感性協調支援実験 信学技報 CVIM-140 社会法人 電子情報通信学会

吉良文郷・仲谷美江・西田正吾 (2003). 身体性に注目した感性協調支援実験 リズムを介した共同作業について 信学技報 HCS2002-43 社会法人 電子情報通信学会